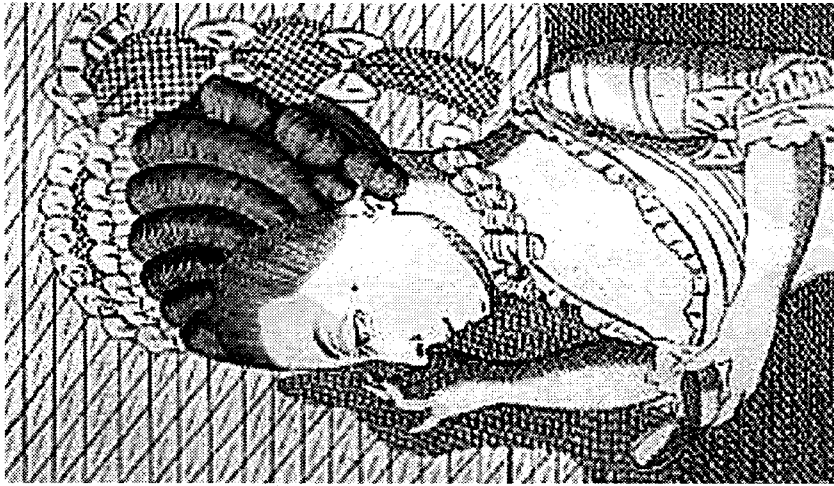


ほくろって何なの？



つげほくろで表した女性。1700年にフランスで出版されたファッションの本の挿絵から(ポーラ文化研究所提供)

昔はなかったのに、ほくろ出現！年をとるとなぜ増えるのでしょうか。

「増えるというよりも、目に現えるものばかりです。ただ、もともと皮膚の中にほくろの細胞があったのです」と稲葉クリニック(東京・阿佐谷)の稲葉義方院長は話す。

ほくろの土台となるのが、生まれながらの「母斑細胞」。自らの目に見えないけれど、年月をかけてゆくりと増える。その細胞の一部にメラニン色素ができて茶色になると、ほくろに変わっていくわけ。

ほくろが増える人がいれば、さほど増えない人も。その人の母斑細胞が多いか少ないか、生まれながらの体質によるんだって。

稲葉院長は連日、ほくろの切除手術をこなす。「ごらしても気になるなら、なるべく小さいうちに切ったほうがいい」。切らなくて



付けておしゃれも

ほくろをとりたい。もちろん女性は今も高層多かったです。

江戸末期に出版された「浮城物語」には、カフの種をすりつぶして毎晩ほくろに塗ればよい、といった対処法が載っている。

化粧品研究家の高橋雅夫さんは「遊女や役者の入れ墨を『入れほくろ』と呼んでいましたが、江戸時代、欧州のようにほくろをフ

か、レーザーをあてれば消えるのでは？「レーザーで切るなら別ですが、レーザーでメラニン色素を焼いて薄くする方法は一時のき。母斑細胞は残るので、また出ますよ。気にならないなら無理にすることもない。でも、注

ツシヨに利用した記録は見あたりません。

欧州？ フラッシュ？ ポーラ文化研究所(東京・銀座)の津田紀代主任学芸員に聞くと、16世紀末から18世紀にかけて、フランスやイギリスをはじめ欧州各国でつけほくろがはやってきた。黒い布や紙を、星や三日月、馬車など様々な形に切って顔につけたという。

「当初の目的は、肌の白さを強調したり、シミ・そ

意しなきゃいけないのは、一見ほくろに見えるが、「悪性黒色腫」。ほつたらかしたるど、全身に転移し、命にかかわる。

丸い形ではなく縁がギザギザで薄茶や黒が滲むなど色にムラで鉛筆の底をあてても隠れない大きさ——の場合は、皮膚科医に相談したほうがいいです。

メラニン色素ができないはずの手のひらや足の裏にできたものも要注意。稲葉院長は「黒色腫は年齢が上がるほど多くなりますが、まれに10代の若い人に見えることもあるんですよ」。

ばかすを隠したりするため。それが発展し、貴族の女性に限らず、聖職者の男性までが愛用するようになった」と津田さん。

何個もつけて顔がつけほくろだらけの女性もいたし、つける位置で、未婚か既婚かや支持政党を知らせることもあったんだって。

《マリリン描くは目鼻はいらぬ唇、ほくろがあればいい》。この都々逸の作者は、女優マリリン・モンロー(1926～62)の研究で知られる松本良夫・東京学芸大名誉教授。確かに、向かって唇の右上にあるほくろは、彼女のトレードマークだったね。

でも、松本さんが調べたら、ほくろが唇の右下や左上にある写真や、どこにもない写真も残っていた。「右上のほくろはたぶん天然のもの。役柄やカメラ映りを意識して化粧で消し、別の場所につけほくろをしたこともあったのでは」。ほくろが与える印象を熟知してたことかな。

知らない間にほくろが増えていて、びっくりすることがあります。「ほくろを教える」とも言われますが、そもそも、ほくろって、いったい何なのでしょう。何のためにできるのでしょうか。教えてください。

(埼玉県朝霞市 小学6年生の女子)



日本でも明治時代になると、ほくろをフッシュヨンに使う発想が輸入されたいらしい。1906年刊行の美容書「新化粧」は墨で顔にほくろを描く「欧州の化粧法」を紹介し、顔を白く見せ、愛嬌が増すと説明。「描き

「ほくろ」が広まったからか、27年刊行の「美容と美髪」には描き方のノウハウまで。いろんな話を聞こうちに、だれかと話しているも、テレビを見ても、その人の顔のほくろに見入るようになっちゃった。

日常生活で感じた「なぜ？」をお寄せ下さい。連絡先を明記し、〒104・8011朝日新聞生活グループ「モンジョー」係。ファクス03・5540・7354。メールmonjiro@asahi.com